

国はうそをつく あの時も今も 元通信兵の日比野さん

中日新聞 2017年8月16日 朝刊

終戦記念日に黙とうする日比野藤雄さん＝15日正午、名古屋市中区の愛知県護国神社で（嶋邦夫撮影）



旧日本軍の通信兵だった日比野藤雄さん（90）＝愛知県一宮市＝は、やるせない思いで終戦の日を迎えた。戦時中、日本の劣勢を報じる敵国の放送を傍受していたが、「連戦連勝」を伝える大本営発表を信じ、最後に裏切られた。そしてこの夏。陸上自衛隊の日報問題などを巡る国の釈明を「うそだ」と言い切り、不都合な事実を隠し続けたかつての日本に重ね合わせる。

十五日正午、日比野さんは雨交じりの愛知県護国神社（名古屋市中区）の参拝者の列にいた。「あなたたちを犠牲にした戦争は、絶対に繰り返さない」。平和を祈り、戦没者に黙とうをささげた。

七十二年前の同じ日の正午、日比野さんは千島列島の北東端・シュムシュ島（占守島）にいた。「朕（ちん）は帝国政府をして米英…共同宣言を受諾…」。雑音混じりの玉音放送に耳を澄ます将兵たちの前で、通信兵として受信機の周波数を細かく調整しながら、気持ちは急速に冷めていった。「やっぱり負けていたか…」



十六歳で海軍に志願。英語や暗号の解読法をたたき込まれ、一九四四（昭和十九）年の秋、占守島に赴いた。敵の通信を傍受し、艦隊や潜水艦の位置を探る任務だったが、赴任して間もなくフィリピンのレイテ沖海戦で戦艦武蔵が沈み、翌年の四月には沖縄に向かった大和も沈んだ。

傍受した米国のラジオ局は連日、日本の劣勢を報じていた。それでも、内地（日本本土）の大本営は「勝った、勝った」と電報を送ってきた。「どうも違う」。疑いと焦り。

「日本は敗れた。兵隊さんは国へ帰りなさい」と伝えた米国のラジオをデマだと信じようと努力した翌日、玉音放送が敗戦を告げた。

オホーツク海に面したソ連（現ロシア）・マガダンでの四年間の抑留を経て、ようやく戻った祖国で知ったのは、大本営発表が「うその塊」だったことだ。「国民は踊らされ、ひどい戦争をした。国は都合の悪い情報を隠し、うそをつく」

その思いが七十二年後の今、よみがえる。

南スーダン国連平和維持活動（PKO）部隊の日報隠蔽（いんぺい）問題。「戦闘行為があった」と記した現地部隊の日報について、当初「廃棄済み」としていた国は「改めて調べたら見つかった」（防衛省）と釈明した。加計（かけ）学園問題でも、学部新設が安倍晋三首相の意向だったことをうかがわせる文書を「ない」としていた文部科学省が、後に「見つかった」と訂正している。

「都合が悪かったから隠した」。日比野さんは「われわれをだまし続けたあの時と同じだ」と感じている。真相がいまいなまま幕引きを図るかのような政府の姿勢。「たった七十年前の反省を忘れるなんて」と、憤りと失望をにじませた。

（中野祐紀）

＜大本営発表＞ 太平洋戦争中、旧日本軍の最高司令部「大本営」による戦況の発表。撃沈した敵の船を過大に、空襲などの味方の被害を過小に伝えたほか、部隊の撤退を「転進」、全滅を「玉砕」と言い換えた。戦後は「あてにならない当局の発表」の比喩として定着している。

潜入、盗聴、秘密工作…CIA、復帰前の沖縄にスパイのアジア拠点 元要員の家族が証言

沖縄タイムス 2017年8月16日 07:35

【ジョン・ミッチェル特約通信員】1972年の本土復帰まで米中央情報局（CIA）の秘密施設だった「キャンプ知念」（現南城市玉城）を拠点に、アジア全域でスパイ活動が展開されていたことが元要員の家族の証言で分かった。活動は潜入、盗聴、秘密工作など多岐にわたっていた。嚴重に秘匿されてきたキャンプ知念の実態について、沖縄の従業員の証言は発掘されてきたが、米側からの証言は初めてとみられる。



ロバート・ジャクソン氏



現在の琉球ゴルフクラブにあったC I Aの秘密施設キャンプ知念。広い敷地にプールなどが点在する（撮影年不明、ロバート・ジャクソン氏提供）

本紙の取材に応じたのは米国人で中東オマーン在住のロバート・ジャクソン氏（57）。C I A要員だった父の転勤に伴い1963～72年の間、2回に分けて計6年間、キャンプ知念で暮らした。当時の記憶のほか、後に父から聞き取った内容を明かした。

キャンプ知念についてインターネットで調べたことをきっかけに2012年、沖縄を再訪。基地問題にも関心を持つようになった。いまだに残る基地について「不正義であり不必要だ。父も閉鎖されることを願っていた」と語る。

ジャクソン氏によると、施設所属の要員は米本国のC I A本部からの指令に基づいて行動した。タイの首都バンコクでソ連駐在武官の事務所に盗聴器を仕掛けたり、香港で中国軍人の脱出を手助けしたりした。東南アジアに米軍機

で潜入する任務もあった。

施設の一角に置かれた隠れ家では外国人に特殊訓練を施した。倉庫には消音器付きの銃やエンジンを静かに改造した小型ボートなど秘密作戦用の装備があった。施設内には工房があり、インドネシアのパスポートや雇用書類を偽造したことがあった。偽造のため、あらゆる種類の紙やインク、外国製のタイプライター、入国管理局のスタンプが備えられていた。ジャクソン氏は「キャンプ知念は表向き陸軍の補給施設とされ、リゾート施設のようにも見えた。実際にはC I A施設の中でも最も機密性が高く、アジア全体の任務に大きな役割を果たした」と指摘した。

沖縄戦 託されたメダル 負傷の兵士「家族に渡して」 那覇出身女性、持ち主捜し

毎日新聞 2017年8月16日 東京夕刊



吉岡邦子さんが持ち主を探している、方位磁針に付けられた古い銅メダル（左）とメモ＝共同

那覇市出身で東京都練馬区の吉岡邦子さん（57）が、古い銅メダルの持ち主を捜している。太平洋戦争末期の沖縄戦で、「丹上ヒロシ」と名乗る旧日本軍の通信兵が、吉岡さんの母に「家族に渡して」と託したものだ。兵士の生死は不明。吉岡さんは「彼が生きた証し。家族に返すか、せめて故郷に埋めてあげたい」と話している。

メダルは3センチ大の五角形。柔道の組み手や「柔」の文字が描かれ、裏面には木の葉の装飾とともに「KU…

戦後72年の表現者たち / 2 能勢広さん（69年生まれ、カメラマン） 祖父の見た広島をたどる

毎日新聞 2017年8月16日 東京夕刊

映画は穏やかな冬の光に包まれる原爆ドームから始まる。相模原市の映像カメラマン、能勢広さん（48）は、祖父で同じくカメラマンだった鈴木喜代治さん（1989年死去）が見た被爆直後の広島をたどり、今年、記録映画「広島原爆 魂の撮影メモ」を完成させた。



能勢広さん＝高橋咲子撮影

原爆投下直後の爆心地を撮影した映像は少ない。投下から1カ月半後の広島をフィルムに収めたのが、日本映画社が旧文部省と製作した「広島・長崎における原子爆弾の影響」だ。鈴木さんは撮影に参加した一人だ。

【続きあり】

特集ワイド 会いたい・2017年夏／7 藤子・F・不二雄さん 誰もが「のび太」の心を

毎日新聞 2017年8月16日 東京夕刊



藤子・F・不二雄さん

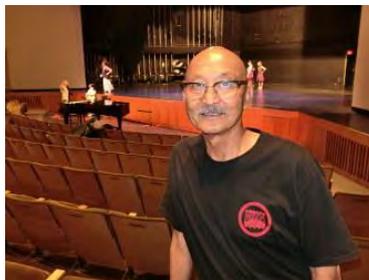
藤子・F・不二雄さん 漫画家（1996年死去、享年62）

この夏一番の猛暑が首都圏を襲った日、藤子・F・不二雄さんの面影を求め、川崎市を訪ねた。台風が去った直後で空は真っ青。輝くような白い雲が浮かんでいる。この配色、まるで「ドラえもん」じゃないか。なんだか愉快になり、口笛でも吹きたくなる。

同市は藤子さんが長く住んだゆかりの地で、約5万点の原画などを展示する「藤子・F・不二雄ミュージアム」（多摩区）が建っている。館長の伊藤善章（ぜんしょう）さん（68）は豪快で、どこかジャイアンをほうふつとさせる。小学館プロダクション時代から約20年間、藤子さんと接し、現在は藤子プロの社長も務めている。

「先生は気難しいイメージがありましたね。寡黙で人付き合いは苦手。一方、こちらが圧倒されるほど知識が…」

米国 被爆の苦しみ、伝える…日系3世、9月に舞台公演 毎日新聞 2017年8月16日 10時58分(最終更新 8月16日 11時31分)



舞台のリハーサルにのぞんだリチャード・ユタカ・フクハラさん＝米ロサンゼルスのアラタニ劇場で2017年8月13日、長野宏美撮影

【ロサンゼルス長野宏美】歌や舞踊、証言映像などを通して広島と長崎の原爆による影響や被爆者の体験を伝える舞台公演が9月、ロサンゼルスで開催される。制作総指揮を務める日系3世の写真家リチャード・ユタカ・フクハラさん（72）は「米朝の緊張が高まる今、核の脅威を知る重要性が増している」と語る。

フクハラさんは第二次大戦中に北西部アイダホ州の日系人強制収容所で生まれた。子どもの頃は日本人の蔑称である「ジャップ」と呼ばれ、「自分は米国人だ。日系人でありたくない」と思うほど偏見に苦しんだという。

2010年に被爆者の体験を聞き、「米国では被爆者の苦しみが十分知られていない。原爆投下により何が起きたか伝えるべきだ」と感じ、体験を語り継ぐNPOをカリフォルニア州で設立した。

舞台公演は初めてで「平和の午後 広島と長崎が経験したこと」と題して9月16日に開催される。原爆当日の状況を舞踊で表現し、被爆者の証言映像などを交え、「彼らの経験を忘れないで」という思いを伝える。フクハラさんは「歴史を知らなければ、同じ過ちを繰り返す」と訴えた。

公演の来場者に渡すための平和へのメッセージを募集している。問い合わせは izumi@hollywood-pr.com まで。

核兵器廃絶 折り鶴に折り17年…平和大使に27万羽託す

毎日新聞 2017年8月16日 12時45分(最終更新 8月16日 13時52分)

母、姉が長崎で被爆…藤原さん、毎日折り続け

長崎県五島市玉之浦町の藤原良子さん（79）が、平和への願いを込めた折り鶴を17年間ほぼ毎日折り続けている。折り鶴は毎年、核兵器廃絶の署名を集める活動をしている「高校生平和大使」に託してスイス・ジュネーブの国連欧州本部に届けており、この間に折った鶴は27万羽を

超える。平和大使の活動が開始から20年目になる今年はいつよりも数を増やし、千羽鶴20本分の2万羽を託す。

【浅野翔太郎】



今年の高校生平和大使の溝上大喜さん（右）らに折り鶴を手渡す藤原良子さん（中央）＝長崎県五島市玉之浦町で、浅野翔太郎撮影

藤原さんは五島市にある福江島の最西端、東シナ海に面した集落で暮らす。長崎への原爆投下当時は7歳で、母とともに五島にいた。八つ年上の姉は学徒動員で長崎市内にいて被爆した。幸い無事だったが、心配して長崎に向かった母も入市被爆した。

鶴を折り始めたのは2000年。次男（当時4歳）を急性白血病で亡くした時に病院で知り合い、その後30年近く連絡を取り合ってきた知人の女性から「孫が高校生平和大使になった」と聞いたのがきっかけだった。次男の闘病中にも折り鶴をつくった経験があり、「少しでも皆さんの励みになれば」と久々に折った。

それ以来、白内障の手術で一昨年に入院した2日間以外は毎日折ってきた。両手の人さし指にはペンだこのような「折り鶴だこ」ができた。「折り鶴を折ることは、私の人生の一部」と話す。

折り鶴は核兵器廃絶の署名を届けるために国連欧州本部を訪れる高校生平和大使に託してきた。例年、千羽鶴15本分の1万5000羽を手渡すが、今年は2万羽を作った。平和大使は20日に渡欧し、折り鶴は国連欧州本部内に展示される。

藤原さん宅を訪れて千羽鶴を受け取った平和大使の溝上大喜さん（17）＝長崎北陽台高2年＝は「一羽一羽に込めた思いを感じた。責任をもって国連に届ける」と話した。藤原さんは「若い人がこうして平和のために頑張っている姿を見ると、私も元気づけられる」と語った。

「生き物殺さぬように」 絞首刑の元軍医、妻と娘に遺書
朝日新聞デジタル 2017年8月16日 23時15分

「総（すべ）ては宿命です。誰か甘受せねばならぬ運命を私が背負って行くわけです……」。タイとミャンマー（ビルマ）を結ぶ泰緬（たいめん）鉄道建設をめぐる捕虜虐待の罪に問われ、「BC級戦犯」として1947年に絞首刑となった元軍医の信沢寿さんは死の直前、妻と娘に遺書を書いていた。「主人の最後はどうでございましたでしょう

か」。遺書を届けてもらったお礼に、妻つねさんは教誨師（きょうかいし）を務めた明長寺（川崎市）の住職、関口亮共さんに手紙とはがきを送っていた。遺書の全文と手紙の抜粋を紹介する。

■信沢寿さんが妻つねさんにあてた遺書
遺書（二十五日午前四時書ク）

かたわらに秋草の花語るらく亡（ほろ）びしものは美しきかな

と牧水は歌つて居（お）りますが私は本日午前十時半この美しき仲間に入ります。歴史的日本敗戦の犠牲となりてシンガポール・チャンギー監獄の絞首台上の露と消えて行きます。私の埋められる処には果たして秋草の花が咲いているや、いな名もなき熱帯の雑草にて近く覆はれてしまうでせう。

昭和二十一年六月二十日英シン…
残り：1889文字／全文：2334文字

「写真が戦争を終わらせる力に」 沢田教一展開幕 東京
朝日新聞デジタル 2017年8月16日 12時25分



母親

に抱かれた自身（写真右端）が写っている「安全への逃避」を見るグエン・ティ・フエさん（右）と沢田サタさん＝16日午前、東京都中央区、鬼室黎撮影

ベトナム戦争を写し、ピューリツァー賞など数々の賞を受けた故沢田教一さんの写真展「写真家 沢田教一展——その視線の先に」（朝日新聞社主催）が16日、日本橋高島屋（東京都中央区）で開幕した。

会場には、ベトナムの古都フエでの市街戦など戦争の悲劇をはじめ、妻のサタさん（92）や故郷の青森を写した約150点の写真とともにカメラなどの遺品約30点も展示されている。

沢田さんは、必死の形相で川を渡る家族を捉えた「安全への逃避」（1965年）でピューリツァー賞と世界報道写真大賞を受賞した。当時2歳で母親に抱かれて写真に写ったグエン・ティ・フエさん（54）も今回、初来日し、開会式に同席した。「あの時、沢田さんがポケットから出したハンカチで私の涙を拭いてくれたことを母から聞いた。写真が戦争を終わらせる一つの力になったと思う」と語った。

妻のサタさんは「戦場だけではなく、風景や子どもの写真も展示されるのは沢田の望み。戦争カメラマンではなく、写真家と呼ばれたがっていた。喜んでいるだろう」とあいさつした。28日まで。一般800円、大学・高校生600円、中学生以下無料。

「水俣病」の痛み、なお 記者が見た水俣の現在
朝日新聞デジタル奥正光 2017年8月16日 19時11分



地図

熊本県の南端に位置する水俣市は、かつて小さな農漁村だった。戦後、経済成長を牽引（けんいん）した企業が起こした「水俣病」を背負い、住民はいまも「痛み」を抱える。公害に翻弄（ほんろう）された当時の写真を携え、この地をめぐる。



かつてチ

ツツが有機水銀を流した百間排水口＝熊本県水俣市月浦

①百間排水口

水俣駅の改札口から真正面に見えるのが、水俣病の原因企業チツツの工場（現JNC水俣製造所）正門だ。排水口はそこから1キロ弱。同社は1932年から30年以上、有機水銀を含む廃水を流した。近くに立つ水俣市の説明板は「水俣病原点の地」と伝えている。



1975年

12月に撮影された百間排水口付近の様子。メチル水銀を含む濃厚ヘドロが堆積（たいせき）している。小型の漁船が並び、漁業が盛んだったことがしのばれる

ボラやチヌ（クロダイ）が泳ぐ水路を見渡すと、じっと排水口を見据え、花が絶えないお地蔵さまに気づく。新潟水俣病が発生した阿賀野川の石でつくられたといい、横にはこう刻まれている。



百間排水口を向いているお地蔵さまには花が絶えない＝熊本県水俣市月浦

鎮魂之聖地
遺恨浄土之地
働哭永遠之地



エ

コパーク水俣＝7月20日、熊本県水俣市、ドローンで小宮路勝撮影

この付近から汚染された海の58ヘクタールが埋め立てられ、今は「エコパーク水俣」という公園になった。毎年5月1日に犠牲者慰霊式が営まれる水俣病慰霊の碑や、水俣病資料館も近い「鎮魂の地」だ。

【続きあり】

戦争って何？ 想像を ペリリユー島舞台の漫画 反響大きく

東京新聞 2017年8月16日 夕刊

「ペリリユー—楽園のゲルニカー」を手にする漫画家の武田一義さん＝東京都千代田区で



太平洋戦争後期の一九四四年、日米両軍が多数の犠牲者を出した西太平洋のペリリュー島（現パラオ共和国）での戦いをテーマに、青年誌で連載中の漫画「ペリリュー楽園のゲルニカ」（白泉社）が反響を呼んでいる。かわいらしい絵柄ながら、壮絶な戦場を描き、青年誌としては異色の題材。作者の武田一義さん（41）は「兵士は、自分たちと変わらない普通の人だった。今も世界で起きている戦争に想像力を向けてほしい」と話す。（小松田健一）

きっかけは二〇一五年四月、戦没者慰霊のため天皇、皇后両陛下がペリリュー島を訪問されたことだった。ちょうど次回作のテーマに戦争を考えていた時、目に留まり、昨年二月から青年誌「ヤングアニマル」で連載を始めた。副題の「楽園のゲルニカ」は一九三七年、スペイン内戦に介入したドイツ軍の無差別空襲を受けた都市ゲルニカと、美しい自然に囲まれたペリリュー島を重ね合わせた。

主人公の「田丸一等兵」は、漫画家を目指す二十一歳のおとなしい青年。武田さんは「田丸は兵士として人生を全うするつもりがない。読者が自分たちに置き換えて読める主人公にしたかった」と説明する。

次々と倒れる両軍兵士、傷病兵の集団自決…。死が日常だった戦場を描きながら、漫画として成り立たせることに苦心した。「残酷さを伝える一方、戦場で亡くなった人、その遺族への謙虚な気持ちも忘れてはいけない。常に悩みながら描いている」

ペリリュー島の戦いを研究している「太平洋戦争研究会」の平塚紘緒（まさお）さん（79）が、戦闘経過や兵士の服装、兵器の考証などで協力。平塚さんは「漫画にすると聞かされた時は驚いたが、一読者として引き込まれていった。若い世代が、これを入りに戦争へ目を向ければいい」と期待する。

担当編集者によると、反響の目安となる読者アンケートの数は、一回当たり二百～三百本と連載作の上位。「グラビアを目当てに買い、たまたま読んだら面白かった」という声もあるという。今年六月には本年度の日本漫画家協会賞優秀賞を受賞した。

物語はこれから、日本軍の組織的戦闘が終結後、田丸らが生き残るために身を潜める様子を描いていく。武田さんは「個々人の生き方に迫りたい」と意気込んだ。

<ペリリュー島の戦い> フィリピン島の東に位置するパ

ラオ諸島・ペリリュー島は、日本軍が大規模飛行場を置く重要拠点だった。約4万人を投入した米軍が1944年9月15日に上陸。洞窟陣地にこもった約1万人の日本軍守備隊は緒戦で米軍に大きな被害を与えたものの、次第に物量に勝る米軍が圧倒した。持久戦を命じられた守備隊には補給がなく、11月24日に指揮官らが自決。生還者は軍属の朝鮮人労働者を含めて446人だった。

終戦の日 不戦の誓い次世代へ 毎日「平和のブログ」10年目

東京新聞 2017年8月16日 朝刊

永井至正さん



七十二年前の八月十五日、東京都江東区の永井至正（よしまさ）さん（85）は、旧満州（中国東北部）から引き揚げる途中で、解放に沸く朝鮮の平壤駅構内にいた。兄を特攻隊で失い、命からがら日本にたどり着いたかつての軍国少年は戦後「再び戦争はさせない」と強い思いを抱いた。永井さんは戦争体験を次世代に語り継ぐため、この九年間、毎日、平和への思いをブログにつづっている。（片山夏子）

「毎日、毎日、あの戦争は、特攻隊で死んでいったのは何だったのかを考える。そして今生き残ったもののできることは何か自問する」。十五日、永井さんは自宅のパソコンで自身のブログ「満州っ子 平和をうたう」に書き込んだ。終戦の年がよみがえる。

永井さんは旧満州の公主嶺（こうしゅれい）市で母と姉と暮らしていた。一九四五年八月九日、旧ソ連が侵攻し、当時十三歳だった永井さんは二日後、家族と共に貨車に飛び乗った。ぎゅうぎゅう詰めで蒸し暑く、食べ物もトイレもない。体力の無い人から死んでいった。十五日夜、終戦を平壤で知った。

ブログは二〇〇八年六月に始め、旧満州での暮らしなどをつづった。昨年八月十五日には、特攻隊員として二十歳で戦死した兄の神島利則さんのことや、関東軍でロシア語の暗号解読をして戦犯としてシベリア抑留された兄の四郎さん（享年五十一）のことに触れ「『再び戦争はさせない』の思いいっぱい」と書いた。

最近、ブログを見た旧満州での友人の子や孫から連絡が来る。昨年末、長崎県の三十代女性から「夫の曾祖母が幼い祖父を連れ、満州から引き揚げてきた。夫のルーツをたどりたい」とメールが来た。

「戦争体験者の子や孫の世代から『祖父や父が特攻隊や満州でのつらい体験を語らなかったので、戦争のを知りたい』といった真剣なメールがたくさん来る。ブログはもうやめられない。永井さんは、次の世代とつながっていると感じている。

十五日はこう締めくくった。「近い将来、戦争体験者がほとんどいなくなる。お子さんやお孫さんたちにあの戦争をしっかりと伝えること、そしてその人たちがまた次の世代に伝えることを念じたい」

永井さんのブログ (8月15日の文章) ~抜粋~

満州っ子 平和をうたう

2017年 近い将来、戦争体験者がほとんどいなくなる。お子さんやお孫さんたちにあの戦争をしっかりと伝えること、そしてその人たちがまた次の世代に伝えることを念じたい。

2016年 13歳の時の満州での体験、特攻隊で戦死した兄やシベリア送りになった兄のことなどを書き、「再び戦争はさせない」の思いいっぱい。だから戦争体験を次の世代に語り、書きつづり、歌で伝えたい。ほどなく傘寿も半ば、もう後がない、急がなければならない。

2015年 兄の同期生が終戦直前、特攻で亡くなったことを記し、内山光雄海軍中尉ほか5人の若者の顔が、8月になると、今でもよみがえる。

2010年 玉音放送の後に行われた特攻に触れ、終戦を知ってから、若く未来に富む青年たちを道連れにした(上官の)行為はただただ啞然(あぜん)とするばかり。さりとして異次元の世界の話と片付けるわけにはいかない。それは実話だったからだ。

進む世代交代 参列、戦没者妻6人 戦後生まれ4分の1超

東京新聞 2017年8月15日 夕刊

厚生労働省によると、全国戦没者追悼式に参列予定の戦没者の子や孫ら戦後生まれの人は千三百三十九人で、初めて全体(五千二百二十五人)の四分の一を超えた。四年前

の六百三十五人から二倍以上となった。一方、戦没者の妻の参列予定はわずか六人で、世代交代が進む。

「戦争体験を語る人はどんどん減っていく。私たちの世代が受け継いでいかなければいけないと思う」

高崎商科大付属高三年の加藤木七奏(ななみ)さん(17)＝群馬県高崎市＝は式典を前にそう口にした。中国で戦死した母方の曾祖父、都丸幸平さんの遺族として出席し、献花補助者を務めた。

幼いころから曾祖父の遺影を目にしていたが、「ピンとこなかった」。意識が変わったのは、戦没者の遺族として沖縄へ学習旅行に行くことが決まった中学三年の夏。祖母から遺品の制帽を見せられた時だ。

銃で撃たれた穴が開き、血で染まっていた。「衝撃で何も言えなかった。大変なことなんだと初めて実感した」。以来、戦争を伝えるテレビ番組を意識的に見るようになったという。

献花補助者は、参列者が献花台に供える花を手渡すのが役目だ。従来は厚生省の職員が担当していたが、戦争の記憶を次世代に継承するため、昨年からは戦没者のひ孫世代に当たる十八歳未満の遺族が務めるようになった。

今年は、加藤木さんをはじめ、十一～十七歳の男女十四人が担う。

一方、戦没者の妻の参列は年々減り続けている。今年の前回は六人で、全体の0・1%。結婚から七カ月足らずで夫を戦地に送り出した白木トシ子さん(96)＝福岡県中間市＝は「主人は子どもの顔も見ずに死んでいった。戦争だけはごめんだ。戦争の体験を若い人たちに伝えたい」と話した。(藤川大樹、柏崎智子)

不戦の誓い不変 「平和の実現 議論し続けて」戦没者遺族ら訴え

東京新聞 2017年8月15日 夕刊

千鳥ヶ淵戦没者墓苑を訪れ、手を合わせる人たちは15日午前9時23分、東京都千代田区で



戦争を風化させず、平和の願いを引き継いで一。終戦から七十二年がたった十五日、多くの人々が犠牲者を思い起

こして祈り、不戦を誓った。三十六万柱の遺骨を納める千鳥ヶ淵戦没者墓苑（東京都千代田区）と、安倍晋三首相らの靖国神社への公式参拝に反対する集会で、思いを聞いた。

（土門哲雄、石井紀代美、川上義則、荘加卓嗣）

朝から降り続く雨の中、傘を持った参拝者たちが千鳥ヶ淵戦没者墓苑で祈りをささげた。東京都武蔵野市の横山義雄さん（86）は「日本中の人々が戦争で亡くなった。戦争を繰り返してはいけない」。戦時中、近所にあった飛行機工場が空襲を受け山梨に疎開した。「自分も兵隊に行くものだと思っていた」。家族とも無事だったのは幸運と思う。

近年、安倍政権による改憲の動きに賛成する人が多いことに驚いている。「戦争を知らない世代が増えた。憲法をつくった時の思いは変わってしまったのだろうか」と表情を曇らせた。

埼玉県富士見市から来た山口巖さん（85）は、国民学校四年時の担任の先生を供養した。七十人の男子児童を一人で受け持ち、みんなに慕われていた恩師。ソロモン諸島沖の海戦で戦死したと校長から告げられ、教室でみんなが声を押し殺して涙を流した。「平和を望まない人は一人もいない。どう実現するか、議論し続けたいといけない」

兵庫県赤穂市から来た竹本里志さん（78）は五歳の時、父親がビルマ（現ミャンマー）で戦死した。父親が鳥取県の部隊に召集された後、母親と列車に乗り、会いに行った記憶が断片的に残っているだけ。戦後、母親が女手一つで育ててくれた。「母親の苦労をそばで見てきて、大変だったと今でも思う。父親を戦争で亡くしたみんながそうだった。それも、戦争の悲惨な側面です」と目を潤ませた。

鳥取県大山町の山根淳（すなお）さん（75）は中学二年の孫娘と訪れた。陸軍に入った父親はビルマで戦死した。山根さんは四人きょうだいの末っ子で、生後約百日で父親が出征。写真でしか顔を知らない。「戦争を風化させないで、平和の願いを引き継いでほしい」と願う。

越谷市の小畑正子さん（74）は二歳の時、父親が戦死した。沖縄戦で亡くなったそうだが、詳しいことは分かっていない。父親の姿は写真でしか知らない。戦後、骨つぼが届けられたが、石のようなものが入っているだけで、骨はなかった。「もう二度と戦争をしないように、と誓うことが供養。歩ける限り、毎年来ます」と話した。

「過去を忘れるのが早すぎないでしょうか」 なかにし礼さんインタビュー

東京新聞 2017年8月15日 朝刊

戦後72年の終戦記念日の特集は、作家で作詩家のなかにし礼さん（78）のインタビューです。創作の原点であり、生と死そして国家と個人を考える端緒となった戦争の闇を語り、その闇の深さから生まれた憲法を「最高の芸術作品」と呼びました。（聞き手＝編集局次長・瀬口晴義）



◆幼少期に引き揚げ

一せい絶な引き揚げ体験がおありですね。

僕の人生の幕開けは爆弾の音でした。昭和二十年八月で、当時は六歳。交響曲「運命」の第一楽章のようにジャジャジャーン！と目が覚めました。

満州へ両親が北海道の小樽から渡ったのは昭和八年です。酒造りで成功し、私は十三年に生まれました。揺籃（ようらん）の穏やかな時が流れていたのに、にわかにソ連軍が侵攻してきました。

八月十一日の午前十時ごろです。わが家の庭にいて、ソ連軍の爆撃機がものすごい音で飛んできました。目の前で、腹がぱかっと開いて爆弾がぼろりぼろりと落ち始めて。道一本隔てた陸軍の兵器庫を大爆撃したわけです。僕は吹き飛ばされ、家は爆風でガタガタになりました。

父は長春に出張中で留守でした。母は「一日も早く逃げるべきだ」と即断します。関東軍に掛け合い、軍人とその家族を避難させる列車に自身と私、七歳上の姉を潜り込ませました。

夜陰に紛れて牡丹江駅を出発した列車には千何百人も乗っていました。国を守るべき軍人がいち早く国民を捨てて逃げるのです。翌朝、列車が横道河子（おうどうかし）駅の辺りで機銃掃射を受けます。僕たち家族も一般居留民を出し抜いて軍用列車に乗った後ろめたさは感じていましたが、われ先に逃げたのはふんぞり返っていた少佐らしき軍人でした。

機銃掃射の時、母は「おまえは小さいんだから座席の下に隠れなさい」と僕を座席の下に押し込み、外へ飛び降りて逃げた。僕は、親から見捨てられた気分になりました。生まれて初めての残酷な体験です。列車に戻ってきた母は「これからは自分の意思で逃げて、自分の意思で生きなさい」と。母の名言で、僕ががんになった後、生きる力につながりました。

一なかにしさんは、がん治療の方法を自らの考えで選択されました。その原点ですね。ハルビンまでの逃避行では、ご著書に印象的なシーンがあります。

はい。珠河（しゅか）（現・尚志）の駅の手前で、列車が大きな川にさしかかると、鉄橋は今にも壊れそうです。全員下車して川を渡り、貨車だけを通しました。ぬれた体で

向こう岸に着き、列車に乗ろうとすると、長野県からの開拓民たちが押し寄せてきました。病人だけでも乗せてくれと、無蓋（むがい）列車の箱枠にしがみついてきます。

将校は「離れないと、指を切り落とすぞ」と軍刀をかざし、私たちに「その手を振り払え」と叫びます。僕は最後尾の貨車だったので、彼らの手の指一本一本をもぎとるようにはがしていきました。

その指を離せば彼らはそこで餓死するか、歩いて疲れ死ぬか、中国人の暴動で死ぬかです。指をはがしたのは僕たちの意思というより、兵隊の意思です。逆らえば、僕たちも殺される。見殺しという言葉がありますが、見殺しに加担したことが僕の幼年期の第一の罪の意識です。はがされる人の指の感触も、顔も覚えています。

満州で敗戦を迎えた私たちは三度にわたり、国家から見捨てられたわけです。一度目は、関東軍によって棄民されます。二度目は、「居留民はできるかぎり現地に定着せしめる」という外務省からの訓電です。そして三度目は、引き揚げ政策のGHQ（連合軍総司令部）への丸投げでした。

ー引き揚げ船に乗ったのは翌年ですね。

そこでも大人たちの姿に幻滅しました。満州でソ連兵の女狩りに協力した避難民へのリンチ劇…。夜には大人の男女がもぞもぞと重なり合い、うめき声をあげる。

少年心にも、生きていてもしょうがないと。夜の暗い甲板から姉と一緒に死のうとした時、船員さんに止められません。『リンゴの唄』を聞かされ、「君たち、死んではいけない。今、日本では皆この歌を聞きながら、焼け跡から立ち上がろうとしているんだ」と。

僕は、なぜ平気でこんな明るい歌が歌えるんだろう、と思いました。僕は玄界灘の真っ暗な海の上をさまよい、まだ戦争は終わっていない。なのに日本人はもう新しい出発をしている。悲しくて。僕にはとても残酷な歌でした。

中国残留孤児が日本人の生活を見たらどう思うでしょうか。自分たちの戦争はまだ終わっていない。国にも帰れない。やっと訪れたら、自分たちのことなんて忘れて、裕福に生活している。ものすごい悲しい状況でしょう。日本人の得意技ですが、過去を忘れるのが早すぎないでしょうか。私たちはいまだにそうした『リンゴの唄』を歌い続けているわけです。

今年の七月の終わりごろ、生まれ育った旧満州を訪れました。帰国の拠点だった葫蘆（ころ）島には当時の駅舎や鉄道のレールが保存されていました。当時がよみがえり、たまらない気持ちになりました。

◆憲法は最高の芸術

ー日本国憲法を「芸術作品だ」と表現されていますね。

地獄の底でも落ちる深さが深いほど、跳躍する高さは高くなるでしょう。あの戦争でアジア全体で二千万人以上が亡くなった。大変な犠牲を払い、ついに手に入れた最高の憲法ですよ。

米国の押しつけだとか言いますね。けれど、これは戦後日本の再出発の宣言書なんです。世界に向けた宣言書。各国が認めて、反対しませんでした。世界が希望する国の形を与えてくれたとも、われわれが選んだとも言えます。大きな歴史のうねりの中で生まれた。本当に奇跡的な、最高の芸術作品だと思います。

その憲法のもとでとにかく戦争しないで七十数年やってきました。一体これの何が不都合なのでしょう。国民は誰ひとり戦争が起きて幸福にはならないのに、なぜ政治家のまねをして改憲に賛成しなきゃならないのか。政治家とつるんで金もうけでもたくらんでいるのでしょうか。

「美しい日本」「取り戻す」。そうした抽象的な言葉で何に回帰したいのでしょうか。日本の理想はまだ実現されていません。この憲法の名の下にこれから実現するべきなのです。なのにその努力を怠り、反省すべきを反省せず、戦前の軍国主義を勘違いして、そこに「美」を求めるのはとんでもない反動です。

昭和二十年までの軍国主義によってどれだけの人を悲しませ、苦しませ、犠牲にしたか。そして愚かな戦争によってどれだけの若者たちが無駄死にし、犬死にし、飢え死にしたのでしょうか。そして、中国人や韓国人に対してどれだけの過ちをしたか。そうしたことを本当はもっと国民に知らせるべきなんです。

それなのに若者はそれを知らないし、今、それを言おうとすると大変です。小泉政権のころから「日本は悪くなかった」という国民意識の改革のようなものが始まり、そうした洗脳が十年近くかけて実を結んできたわけです。国民意識の変化は怖いですよ。

自民党は改憲を言うとき、「対案を出してくれ」と求めます。それには各党が「反対なんだから対案なんて出す必要はない」と言えばおしまいなんです。もともと改正の必要がないわけだから。そうすれば国民の目も覚めますよ。

自民党の改憲草案は、発想が国家ありき。憲法は国民ありき、個人ありきなのに、逆転の発想がしたくてしょうがないようです。棄民思想をずっと日本はやってきたわけですが、少しも進歩していません。

◆個人が抹殺される

ー現代の「棄民」についてどうお考えですか。

福島原発事故が起きて、当時は民主党政権でしたが、あのときの情報を開示しない状況から思い付いたのは「棄民」でした。今も事故によって故郷を追われ、避難民生活を余儀なくされている。

戦前、国策で満州へどんどん人を入植させました。戦争でやばくなったら、さあ帰ってらっしゃいというのが普通の国家です。今は除染されたから帰れ、帰らないと補助金はあげられないなんて棄民を絵に描いたようなものです。

国という一つの組織となると、人格を失うというか。まさに戦争とは非常事態宣言です。個人がいかに抹殺されて

も国家の正義だというものが論理の上では成り立つわけですから。それでは個人がたまったものではない。犠牲になるのはすべて個人です。そう経験した人たちがだんだん減り、戦争を知らない人たちが戦争を云々（うんぬん）しているのは危険だと思いますね。

人のつながり、熱を「母国」に込め 小田島雄志さん平和の俳句

東京新聞 2017年8月15日 朝刊

終戦時の様子や句に込めた思いを話す小田島雄志さん＝東京都千代田区で



本日一面の「平和の俳句」に掲載された＜八月に母国（ぼこく）という語を抱きしめたい＞の作者は、シェークスピアの全戯曲を翻訳し、演劇評論家として活躍した文化功労者の小田島雄志（おだしまゆうし）さん（86）＝東京都世田谷区、東大名誉教授＝だ。小田島さんは旧満州（現中国東北部）で生まれ、終戦の翌年、十五歳で日本に引き揚げてきた。（矢島智子）

八月は日本の敗戦で中国大陸に取り残された月であり、翌年、引き揚げるために新京（現長春）を出た月でもある。漁船に乗って満州南端の葫蘆島（ころとう）から博多へ。

「憧れた日本がどんどん近づいてくる。その気持ちを表現したくてこの句ができました。母国という言葉には『祖国』よりももっと人間的なつながりがある、もう一步踏み込んだ熱がある」と小田島さんは言う。

なぜ日本に憧れたのか。満州は日本人や満州人など多くの民族が仲良く暮らす「五族協和」を建国のスローガンにしていたが「日本人は日本人街に暮らし、日本語以外は話さない。日本人は満州人が話す日本語のなまりを笑い、満州人も日本人には丁寧語で話す。満州人と友だちになっても互いの心の隙間を絶えず感じていた。日本への憧れは心

を開くことのできる人間への憧れであり、日本に帰れば、同じ日本人として心から付き合えるだろうという夢があったんです」

だが、苦勞してたどり着いた母国で夢は破れる。引き揚げ者に向けられる目は冷たかった。「(国内にいる)日本人だって食えないところへのめめと帰ってきて、自分たちの食うコメが減らされてしまう、という空気があった。おれだって日本人なんだぞ！と言いたかった」

父は旧制一高から東京帝大を出ていたものの、なかなか定職に就けない。日本女子大を休学中の姉が会社勤めをして家族五人を養い、旧制中学になんとか編入してきた小田島さんも日曜日は道路工事、夏休みは工場で石炭運びをして稼いだ。

引き揚げから七十一年の今「母国」という言葉を意識することはなくなった。だが、英文学を研究対象とする中で、自分が微妙なニュアンスを伝えられる日本語の良さを実感し、大学で教えた地方出身の学生たちの話す方言にはうらやましさを感じた。父から手ほどきをうけた俳句にも俳句の中だけで生きる言葉がある。「ますます日本語はいとおしくなりますね」

事実が消されぬように 戦災資料と向き合う26歳

東京新聞 2017年8月15日 朝刊

戦時中の資料を手話で話す東京大空襲・戦災資料センター学芸員の辻口亜衣さん＝東京都江東区で



東京大空襲と原爆。この二つの戦禍に、広島出身の辻口亜衣さん（26）は向き合う。千葉大大学院で原爆投下に関する歴史を研究しながら、ことし4月、民間の東京大空襲・戦災資料センター（東京都江東区）の学芸員になった。

15日は終戦記念日。「資料を残すのは、戦争の事実を伝えてと願う人の思いを残すこと」と、使命の重みを感じている。（辻渕智之）

赤と白の産着（うぶぎ）がセンターの展示にある。生後七カ月の女の子が着て、大空襲で逃げる母におぶわれた。母は背中で眠ったと思ったが、翌朝、息はなかった。「寄贈されたお母さんの、もう二度と戦争を起ささないでという

思いがこもってます」。辻口さんは言う。

誘われて、二年前からセンターの補助研究員になった。今は四人いる学芸員で一番若い。この夏も、白手袋をはめ、資料整理に励む。空襲で焼失して配給用に発行されたという仮戸籍などを扱っている。

生まれ育った広島で新聞記事や学校の教育を通し、原爆に関心をもった。小学校の図書室で、戦争に関する本もよく読んだ。買ってもらった三輪車に乗っていた男の子の被爆死。十代の少年らは被爆後に川へ飛び込み、「海行（ゆ）かば水漬（みづ）く屍（かばね）ー」と軍歌を合唱しながら流されていったという。

「私と変わらぬ年で、なぜ死ななきやいけなかったの?」。高校時代から、原爆資料館の学芸員になるのが夢になった。

「原爆を知るには戦争を知らなきや。戦争を知るには歴史を学ばなきや」と千葉大に進み、歴史学を専攻した。

「八月六日午前八時十五分の一瞬やキノコ雲、やけど、放射能...。そうした固定化されたイメージだけで見てはいけない」。今ではそう考えるようになった。被爆した米兵捕虜を市民が虐待し、避難先の市民の間では部落差別もあったことも知った。

「語られず、忘却されかけた事実や歴史の流れを多角的に見ると、日本人は単純に被害者だったと言えるのかな...」と自問する。被害者の立場が一面的に強調されすぎるのは、権力の側が書く「強者の歴史」の裏返しかもしれないと思う。

仕事や子育てに忙しい同世代の友人からは「戦争のことばかり勉強してどうするの?」と言われることも。自身、奨学金の返済で生活に余裕はない。それでも使命感がある。

「戦争のいろんな事実を知り、消されていかないように伝えたい。時代の空気にただ従順に流されて生きて戦争が起きてしまったら、私たちの子や孫の世代に説明できないから」